

人生のフラッシュバック 【「私の履歴書」エピソード編】

この年齢（60歳）になると、時として“フラッシュバック現象”のように、過去のあらゆるシーンが、一気に、頭や心を駆け回る瞬間が訪れる。

それは、過去と似たような体験をした時であったり、以前に訪れた場所に来た時であったり。

あるいは、昔、好きだった音楽をラジオで聴いた時であったり、テレビで懐かしい映画を見た時であったり、などなど。

きっかけは、いろいろだが、その時々感情であったり、匂いだけでも云おうか、そういう過去のモヤモヤが蜃気楼のように湧き出る感覚だ。

ここでは、私の“人となり”を少しでも知って頂く為に、これまでの人生で印象に残った出来事を、フラッシュバックにも似た“五月雨式エピソード”として、ご紹介しようと思う。

【序章】 思えば遠くへ来たものだ

笑ったり、泣いたり、驚いたり、怒ったり、七転八倒のエピソードに入る前に、

簡単に、私のこれまでの「人生」を駆け足で説明したい。

生れたのは、九州の片田舎。

昭和33年、戦後の復興が始まった時代、高度成長期に向かう、ちょっと前の時代である。



両親は床屋を営んでおり、育った地域は、炭鉱町として賑わっていた。

幼い頃、銭湯の隣にあった私の家（床屋）には、当時、まだ珍しかった白黒テレビが置いてあり、銭湯の行き帰りに、多くの人たちが立ち止まり、店の窓越しに、歌番組や演芸、野球、プロレスなどを熱心に見ていた。

古き良き、昭和の時代である。

子供の頃は、紙芝居屋さんが来ると、お店のレジから5円とか、10円のお小遣いをもらい、

近くの子供たちと一緒に、叔父さんが売るトロリとした水飴を買い、



その後「黄金バット」の物語を夢中で聞いていた。

また、近くには貸本屋さんがあり、小中学校の頃はどっぷりと漫画漬けで、テレビでも草創期だったアニメや洋画（映画）に芯から魅入られ、

勉強とは無縁の夢多き少年時代を過ごした。

60年代、70年代が、私の青春、ど真ん中の時代である。

高校、大学の頃は、フォークブームもあり、音楽やギターに夢中になったり、



車の免許を取って、バイトをしたお金で、あちこちと旅行に行ったりもした。

大学を出て、就職をしたのが80年代の初めで、当時、まだバブル前、就職難の時代でもあり、

やっと入った会社が、熊本の小さな観光写真会社だった。

職種は添乗カメラマンで、何をやる仕事か、よくわかっていなかったのだが、2日～3日、簡単な研修を受けて、すぐに団体旅行の添乗カメラマンを任された。

要するに、観光会社と提携し、添乗員の仕事を手伝いつつ、観光バスに乗り込み、



各観光地で団体写真やスナップ写真を撮って、それを記念アルバムとして、団体客に買ってもらう、という商売である。

最初は九州を中心に回っていたが、その内、四国の中学校の修学旅行や永平寺や高野山の宿坊巡り、北海道一周旅行、などなど、



いろいろな地域を任されるようになっていった。

まだ、若かった私は、そんな出張生活を一年続けた後、少しゆっくりしたいと思い、画廊に転職したのだが、

そこは、何んと訪問販売会社で、私は思いがけなく、完全歩合制の営業〔訪問販売〕の仕事をするようになった。

ただ、その会社で、私は多くのことを学び、結果として、その後の人生を決定づける



「総務人事」という職種に就くと共に、30歳の時、東京へと居住を移すきっかけ（人事異動）を得たのである。



その頃の私は、自己啓発に目覚め、仕事にも、私生活にも、大いに刺激を感じ、

たくさんの人との出会いに、興奮をし、希望も感じていた。

東京に出て、平成の世を迎えると、ステップアップの気持ちが強くなり、

当時、店頭公開を目指していた建築系のメーカーに転職。

そこで、店頭公開に向けての準備や管理部門の運営など、



貴重で得難い経験をするのだが、残念ながら、その会社はバブル崩壊で倒産をし、

その後、某進学塾に人事として転職をすることになった。

その頃、仕事以上に力を入れていたのが、異業種交流会などの社会人サークル活動である。

とにかく、いろいろな人との出会いが、楽しくて仕方なかった。

私は、会社内で、縁の下の力持ち、バックヤードの立場で、まとめ役に回るのが

性に合っていたようなのだが、

そんな性格、仕事柄からか、サークル内でも、まとめ役として、切り盛りをする事が多く、



その信頼感から、社外での多くの人脈（財産＝友）を得ることが出来た。

人の縁は人生の宝物と、最近、しみじみ思ったりする。

年を取ると、そろそろ先の短さも感じ、余計に「人恋しく」なったりするものだろうか。

さて、30代（90年代）の半ば、ややバブル崩壊の兆しが見え始めてきた頃、

知り合いに誘われ、某進学塾を退職し起業に関わるが、2年ほどで解散を迎え、

この大失敗により、私の順調だった人生は、大きく奈落に落ちていく。



この間、まさにどん底生活で、時にはホームレス状態になり、知り合いの家を渡り歩いたり、

やっと借りた安アパートの中で、宝くじの外れ券を見つけ、その300円欲しさに、二駅を歩き、換金をし、帰り道、そのお金で買った夕飯のパンをかじりながら、

この暮らしを決して忘れない、必ず人生を巻き返してやる、と強く自分に誓ったり。

毎日毎日、あがき、もがき続けていた。

そんな暮らしが2年～3年続き、たまたま求人雑誌で見つけたあるベンチャー企業の

事業責任者の募集に応募した所、

面接に出た社長に宿題を出され、二次面接を受けることになった。



人の縁とは不思議なもので、本来、社長が面接をすることはなかったのだが、たまたま、私の時に限り、社長が代理で面接をされたというのが、後でわかった。

さらに、二次面接には会長が出てきて、これも想定外の事態だったようで、私が社長から出された宿題〔経営分析〕を披露する間もなく、

突然、私にお願いしたいと、頭を下げられたのである。

人生の不思議、奇跡を感じた一瞬だった。

後々、その理由を聞くと、

募集には出していなかったが、管理部門の役員から、総務人事の責任者が欲しい、と漏らしていたのを、会長が覚えていて、

直感的に、私が適任だと判断した、ということであった。

人と人との出会い、絆の結びつきは、そんな偶然から生まれるものらしい。

それからの私は、その会社の為に全精力を傾け、数十億円規模の成長に、大きな役割を果たせたのではないかと思う。



そして、約10年、50歳を間近に控えた私は、一つの大きな決心をした。

もう一度、フリーな立場で、自分自身の可能性を追求してみようと、、、。

結果的に、それは失敗に終わり、いろいろな人の期待や応援を裏切る結果になってしまったのだが、

その経験により、私は深く「人生」を考えるようになった。

この間、キャリアカウンセラーとしての活動を始めると共に、



これまで経験をしたことのないブルーワーカーの仕事で生活を支えながら、

次のチャンスを心のどこかで待っていた。

ただ、30代で味わった挫折と大きく違っていたのは、年齢（50代）という壁だった。

私には、あせりがあった。

そのあせりから、いくつものチャンスを棒に振ってしまった。

今、冷静に私の人生を振り返ると、成功パターンにはまっていた時は、組織のバックヤードとして、経営者のサポートをしていた時で、

失敗パターンにはまった時というのは、決まって一人で打って出た時であった。

ここから導き出される答え、私の適性は、創業社長（トップ）ではなく、企業参謀（トップの補佐）にある、という事実である。

2017年、50代最後の年に、親父が亡くなった。

その頃、東京でもがいていた私は、親父の死に目に会えなかった。

親不孝な自分に、チャンスをつかみきれなかった自分に絶望し、

死ぬ一步手前まで、何度となく自分を追い込んだが、結局、死ねなかった。

悩んでいた私に、先ずは田舎に帰ってやり直しなさい、と忠告してくれたのは、

私が九州で画廊に勤務していた頃、以降、30年来、折々にお世話になった税理士の先生だった。

東京からの撤退、イコール、敗残者、という私の見栄だったり、内在的な恐怖心を、先生の言葉で振り切り、

その年の終わりに、年老いた母親のもと〔実家の熊本〕に帰った。

その後の1年間、地元（熊本）でアルバイトや派遣の仕事をしながら、今後、どう生きるべきか、考え続けていた私は、一つの決心をした。

企業参謀（アドバイザーやコンサルタント）としての仕事に、これからの人生を賭けてみよう、と。

そこで、立ち上げたのが、このホームページである。

まだまだ、稚拙なサイトであり、まさに手作りのスタートではあるが、

私の経験や知識、感性は、きっと、多くの企業経営者のお役に立てると信じている。

もちろん、様々な悩みや不安を抱える個人の方々にも、私の人生経験に裏付けされたアドバイスは、立ち直りの契機を与えてくれるはずである。



この後、私が様々な人生のシーンで体験した出来事は、五月雨式エピソード、

私の人生コラムとして、紹介をしていきたい。



そして、もし、何かしら、それぞれのエピソードに感じるものがあれば、是非、気軽に、声を掛けてほしい。

縁は異なるもの、味なもの。

ちょっとしたきっかけで、人の人生、運気は、大いに上がるものである。

全ての人の人生に、幸（さち）多からんことを願いつつ、筆をおきたい。

思えば、遠くへ来たもんだ。

— 五月雨式エピソード 【私の人生コラム】 —

- (1) 世界も次元も飛び越えられる。
それは、野外シネマとの出会いであった。

幼少期、5歳の頃（チコちゃんの年？）に、私は忘れられない経験をした。

野外シネマとの出会いである。

夏の盛り、自宅（お店）の隣りにあった幼稚園の運動場に、

多くの長椅子が並べられていた。

何かのお祭りだろうか。

私はワクワクしながら、映画が上映されるという夜を待っていた。
（実際には、映画がどんなものか、全くわかっていなかったのだが、、、）

目の前の大きな白いスクリーン（銀幕）に、映像が映し出された時、その映像の美しさ、リアルな描写に、私は心の底から魅入られた。



ただ、その映画は白黒だったのか、カラーだったのか、定かではない。

それでも、その記憶以上に美しい映像に出会ったことは、一度もない。

それほどに、その映像は、強烈な印象、インパクトであった。

上映されたのは、2作品。多分、水戸黄門と一心太助だったと思う。

それ以来、漫画、テレビ、小説、音楽、映画と、物語を紡ぐものには、並々ならぬ興味と関心を抱（いだ）くようになっていった。

精神的な人の骨格、背骨を形作るのは、幼い頃の環境や体験であると思うのだが、私の生涯を通して尽きぬ人への関心、興味、好奇心は、

もしかしたら、この体験、経験を土台に、育まれたのかもかもしれない。

(2) 失敗の苦い経験が、人間としての幅を引き上げてくれる。

大学を卒業し、添乗カメラマンとしての仕事に、そろそろ慣れてきていた頃、広島県の宮島で、

提携先の観光会社の団体客を、
厳島神社の大鳥居をバックに写し、

翌日の朝までに、その写真を〔地元の提携現像所で〕現像し、

記念のタイトルを入れた上で渡す、という仕事をやっていた。



それは、一瞬の出来事だった。

次々と入ってくるバス毎に写している中、1台の団体観光客の写真を撮った後、フィルムを巻き戻し、写真機からフィルムを出した瞬間、

ちょっと油断していたのか、パラッとフィルムを落とし、そのフィルムを、台無しにしてしまったのである。

当時、使っていたのはプロの写真機で、カメラから取り出したフィルムは、すぐに輪ゴムで止めて、バラけないように注意を払う必要があった。

私は青くなり、どうしようか迷ったが、結局、添乗員に理由を話し、きつく叱られはしたが、その場は、それで収まった。

ただ、その後、本社に帰るまで、私の心は重く沈んでいた。

本社で社長に会う前、私は「辞表」もやむなしと、ものすごく落ち込んでいた。

だが、社長は、そんな自分の気持ち、若さに気づいていたのか、顔を合わせても、大声で怒ったりはしなかった。

さりげなく、今度から気をつけろよ、と声を掛けてくれた。

私はホッと、胸に込み上げるものを感じた。

それ以降、もちろん、私自身、失敗に懲りて、仕事への緊張感をより意識するようになったが、

それ以上に、他人の失敗に対して、寛容な気持ちを持てるようになった。

そして、部下を持つ立場になり、部下の失敗に接するたびに、

誰にでも失敗はある、大切なのは、リカバリーを心がける意識を持てるかどうかであり、

その気持ちを後押しするのが、上に立つ者の役割である、と。

そういった思いに、その時々、考えを至らせるようになった。

少しばかり、人間的に成長させてくれた出来事であった。

(3) いじめに屈しない、私を支えたものとは？

そのきっかけは、今でも、よく覚えていない。

20代の後半、私が仕事にも慣れ、総務人事の中心を担っていた頃、社内いじめの兆候が、じわじわと現れてきた。

振り返ってみれば、当時、私の上司であり、

その会社の本部長（実質的な社長）であった男性の“裏の顔”に懸念を感じ、

何となく遠ざけ始め、いろんな誘いを断るようになってからであった。



いろんな誘いとは、夜の街（中州）へ繰り出し、賭博に興じたり、キャバレー等で派手に飲み明かしたり、の豪遊であった。

今、思えば、その上司は、私を完全に、盲目的で従順な部下にしようとマインドコントロールを試みていたように感じる。

何故かと云えば、既にその頃、私の所属する本部スタッフでは、彼の命令や意思は、絶対的なものであり、

それを阻む（疑問を呈する）私の存在は、目ざわりそのものであったからだ。

ただ、私自身は、出身母体である営業所のメンバーや、

他の支店や営業所のスタッフたちから厚い信頼を得ていたし、

親会社の社長（所属会社のオーナー）からも、信頼を得て、可愛がられてもいた。

だからこそ、私への本部スタッフのいじめは、深く静かに、より陰険に、長く長く続いていった。

結果を先に話せば、私の上司である本部長は、会社の金に手をつけ、秘書的立場の女性と不倫の関係を続けていた。

それが、オーナーにばれ、結局、その上司は解任された。

それは、私がいじめを受け始めて、1年半後の出来事だった。

つまり、1年半もの間、私はいじめに逆らい続けたのである。

私がいじめに耐えられたのは、

普通に私に接してくれる人たちの存在と、その当時、社会人サークルで出会った人たちとの会社外での交流だった。

この2系統の人間関係がなければ、私の忍耐は限界に達し、上司を追い込む前に、辞表を出していたかもしれない。

そして、もう一つ、私を支えたのは、納得できない事柄には、安易に妥協はせず、納得できるまで引き下がらない、という



めげず、曲げず、あきらめない、強い意志だろう。

ただ、この気持ちの強さが、後々、私を転落に追い込む原因の一つともなり、その扱いには、老練な経験が必要かもしれない。

しかし、この当時は、若さがプラスに働いた。

事件の解決を受けて、私は一段と（本部スタッフを含めた）会社内で、信頼を置いてもらえるようになった。

その後、オーナー（親会社の社長）からの信頼を増した私は、オーナーから、東京本部（グループ本社）への異動を乞われ、

上昇志向に燃えていた私は、喜んで、その依頼に応じた。

私の東京生活は、昭和の終わりとともに始まった。

（４） 誰をリーダーに据えるか、その決断が勝敗のカギとなる。

何かのプロジェクトを成功に導くには、そのプロジェクトを誰に、どう任せるか、の判断にかかっていると思う。

30代後半のある時、私は派遣の仕事で、選挙事務所の事務長という、珍しい仕事に就くことになった。

それは、都内近郊にある中堅都市の市長選だったが、

ある時、選挙事務所に多数の電話を引き込み、

アルバイト（名目はボランティア）の女性に、準備された原稿に沿って、

支持を依頼する電話をかけてもらうことになった。

集められた10名近くの女性を見た私は、一人の女性の利発で聡明な態度に直感を働かせ、

彼女をリーダーに指名し、彼女に仕事の内容を詳しく説明した上で、後の段取り(現場の指揮)を彼女に一任した。

彼女の指揮ぶりは、見事なものであった。

ちなみに、集められた女性たちの採用条件に変わりはなく、彼女が特別な立場、賃金で雇われたわけではない。



ただ、その仕事が予想以上に成功したのは、

彼女のリーダーとしての資質、手腕であり、

それを見抜き、彼女に現場を託し、彼女の仕事に
支障をきたさないよう、

彼女のサポートに徹した私の決断だった。

上に立つ者の一番の仕事は、誰に任せるのか、どう任せるかの
「判断」に尽きると思う。

そして、もちろん、良い結果が出れば、その殊勲者はリーダーと
現場に関わった全スタッフであるし、

失敗に終われば、その責任は、指示を誤った「私」が負うのは、
当然だし、その覚悟がなければ、上位に立つべきではない。

彼女たちを始め、選挙に関わった全スタッフの仕事ぶりには、
候補者や支援者たちも、大いに満足をしていただいたが、

残念ながら、選挙の結果は、僅差で敗れてしまった。

ただ、ここでの経験は、後々、大いに役立った。

もし、もう一度、選挙戦に関わるようなことがあれば、
今度は参謀として、勝利の美酒を飾れるのではないかと

そんな物思いに、時として、ふける夜もある。

(5) 愚直に頭を下げれば、問題解決への道筋は見いだせる。

ある日、私は社長と管理部の役員に呼び出された。

いくつかの部署を閉鎖し、社員10数名をリストラして
ほしい、という依頼だった。

私も40代になり、どん底生活の
反動から、

出来る限り安定した生活を送りたい、
という気持ちが強かった時期で、



この依頼には、正直、気持ちが暗くなってしまった。

社員に首を申し渡すのは、本当につらいものである。

ただ、当然、単刀直入に退社を強要するのは労基法に違反するので、

本人に自主的な退職を促がす数々のテクニックを駆使することになる。

それでも私は、精一杯の誠意と情熱を込めて、該当社員の説得にあたった。

また、会社に対しても、出来る限りの慰労金を用意してもらえよう、

役員との交渉にも尽力をした。

そして、誰に対しても、ひたすら、愚直に、頭を下げ続けた。

それは、形ではない。心の底から、申し訳ないという気持ちの中で、自然に出てきた所作（行動）である。

でなければ、反感を買うのが関の山で、人の心には響かない。

結果、ほとんどの社員は、円満に退社してもらったが、

一部の若手社員が、ユニオンに駆け込み、団体交渉を要求してきた。

この時も、いくつかの対抗的な戦術を仕掛けつつ、団体交渉の場では、ひたすら愚直に頭を下げ続けた。

ユニオンの担当者は、そんな私を強く非難し続けたが、最終的には、妥当な線で折り合いをつけてくれた。

怒りに怒りで対抗すると、その怒りは際限なく荒れ狂う。

愚直に頭を下げ続け、話し合える空気を作り出せれば、落とし所への第一歩が、そこから踏み出せる。

短期は損気。交渉事は、何よりも「辛抱」が第一である。

私に、忍耐の大切さを再確認させてくれた出来事であった。



お問合せ・ご質問・お申込み



▽ お問合せ・ご質問・お申し込みは、以下のアドレス宛にお願いいたします。

info@new-voice.jp

* お試し〔無料〕相談も受け付け中！！

⇒ 090-9813-2302

(ショートメールでの問い合わせも歓迎)

キャリアカウンセラー 年令 60歳 [1958年生まれ]
ニューボイス企画 代表 葉玉 義則 (はだまよしのり)



企業内の総務・人事を20年以上行った経験をもとに、キャリアカウンセラーとして5年以上活動している。

幅広い職種、事業形態の経験も豊富なので、企業サイドの経営相談から個人の労務相談に至るまで、あらゆる立場、状況の人たちからのご相談に応えることが可能。

◆ 人気のアパレル業界！お仕事の内容や魅力とは？〔最近のコラム記事〕

https://www.staffservice.co.jp/job/column/detail_099.html